# 亜急性硬化性全脳炎の疫学調査

研究分担者：東京大学医学部小児科　岡　明

亜急性硬化性全脳炎　全国DPCデータの調査

目的：本疾患の患者実態の把握・新規患者の発生状況の把握
本疾患の現状での臨床経過・治療法の選択との関連

2010年7月から2013年3月に入院し、SSPEの病名がある、またはイノシプレックス投薬中の患者
DPCデータベースから抽出し調査

⇒

対象　74人のSSPE患者が入院加療を受けていた。男女比は1.76で平均年齢は24歳であった。
治療：抗ウイルス療法に関して、イノシプレックス（約60%）、インターフェロン（30%）、無治療（35%）であった。
胃管から、胃瘻からの経腸栄養、人工呼吸管理がそれぞれ約20%、50%, 30%で施行。

⇩

平成24年の調査で我が国では麻疹対策は効果を挙げ新規発症例は減少傾向にあると考えられるが、亜急性硬化性全脳炎の患者は依然として入院加療を要していた。抗ウイルス治療を特に実施していない患者が35%であり、重症度と治療との間にも有意な相関を認めなかった。
本研究班として平成２８年度に疫学調査を行い、継続的に実態調査を行う。
本研究を行うにあたりご指導ご協力頂いた東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻臨床疫学・経済学康永秀生教授に深謝いたします。

研究施設 東京大学大学院医学部小児科、杏林大学医学部小児科、静岡県立こども病院、大阪府立母子保健総合医療センター、岡山大学大学院発達神経病態学、国立感染症研究所感染症情報センター

## 解　説

1. 我が国は厚生行政として麻疹の撲滅に取り組んでいるが、今後も麻疹感染後に発症する亜急性硬化性全脳炎の発生のリスクは持続している。
2. 全国で亜急性硬化性全脳炎の患者は依然として入院加療を要していた。抗ウイルス治療を行っていない患者も多く、重症度と治療との間に有意な関連は観察されなかった。
3. 今後も継続的に実態調査を定期的に実施する必要がある。